

修士論文

『列仙伝』における神仙観

弘前大学大学院教育学研究科 教科教育専攻 国語教育専修 漢文学分野

09GP206 原 真奈美

目次

はじめに	1ページ
第一章 神話的要素	1ページ
第二章 仙人の特徴	7ページ
第三章 『列仙伝』『神仙伝』の比較	
第一節 比較	10ページ
第二節 彭祖から見る仙人像	11ページ
おわりに	12ページ
参考文献一覧	12ページ

修士論文要旨

『列仙伝』に登場する冒頭の十人の仙人はそれ以降の六十三人とは違う傾向を持つ。涓子以降に続く仙人が我々の想像しうる仙人の特徴（不老不死、空を飛ぶなど）を持つものに対し、関令尹までの十人は天から神の使者という役割を持って地上に遣って来て、人間に様々なことを教える。つまり『列仙伝』冒頭は天地創造の神話的な構造になっていると言える。

涓子以降の仙人達は各々性質が異なり、多種多様である。しかし多くの仙人に当てはまるのは、人間との繋がりに執着していることである。仙人の中には帝に仕え国を良くするために働いている者もいれば、自分で作った薬を病氣の人に配る者もいる。災害を予言して村の人々を助けたり、行方をくらましてから何十年後かに戻ってきたりするのは、仙人が人間との繋がりを欲しているからだろう。そのため『列仙伝』の仙人は人間のどこか近くで存在しており、人間と関わり合いながら生活してきたのだ。

また『神仙伝』は『列仙伝』に比べて仙人個々のエピソードが豊富でより詳しい人柄がわかる。老子・彭祖・劉安は『列仙伝』にも取り上げられているが、その時よりもさらにエピソードが付け足されている。同じ仙人でありながらこのような違いがあるのは、仙人ならばこのようなエピソードもあつたに違いないという筆者の願望が込められているからだと考えられる。そしてその付け加えられたエピソードから『神仙伝』の仙人像が見えてくる。

『神仙伝』の仙人は空を飛び、獣に変化し、人間世界とは距離を置く。人々は万能な仙人になって仙界で永遠に生活するのを理想とし、そのために修行して仙薬を服用した。ところが『列仙伝』の仙人は仙術を使う者もいるが、人々はその能力に憧れたわけではない。健康の延長上に不老不死があり、それを体現化したのが仙人だったのである。人々は人助けをして何百歳までも生きる仙人のような生き方を目指したのだ。

はじめに

『列仙伝』は漢の劉向の撰とされ、伝説上の神農、黄帝の頃から前漢の宣帝までの様々な仙人の伝記を集めたものである。『列仙伝』が書かれる以前から神仙思想は存在しており、『史記』封禪書や『漢書』郊祀志にも見られる。しかし当時はまだ仙人個々の伝記として記された書物は残されておらず、様々な書物の中に点々と姿を見せていただけであった。劉向はこれらの仙人を集めて『列仙伝』を記した。つまり『列仙伝』は仙人の伝記を集めた最初の書であると言える。

今回扱っているテキスト沢田瑞穂訳『列仙伝・神仙伝』の中の『列仙伝』では、『列仙伝校正本』の著者王照円が、『列仙伝』の散佚した文と考えられるものを他書から引いて補ったとして三名の神仙が追加してある。今回はこの三名も加え、七十三名の神仙を取り扱うこととする。

第一章 神話的要素

列仙伝・卷上は四十二人、卷下は三十一人の仙人の伝記が挙げられている。卷上は赤松子から始まり、甯封子、馬師皇：と続いていくのだが、その中の赤松子から関令尹までの十人にはそれ以降に続く仙人と違う傾向がある。涓子以降に続く仙人が我々の想像しうる仙人の特徴（不老不死、空を飛ぶなど）を持つのに対し、関令尹までの十人は天と地の狭間に存在している。天を神、地を人間とする、限りなく神の要素を持ちながら人間と交わっている。天と地を上下することにより、神と人を結びつける役割を持つているのだ。赤松子から関令尹までの十人は、天から神の使者という役割を持つて地上に遣つて来て、人間に様々なことを教える。そして世の中が出来上がるとまた天へと帰って行く。『列仙伝』冒頭は天地創造の神話的な構造になっているのだ。

まず第一章では卷上の冒頭十人の仙人について考察する。

・赤松子

雨師は「神農時雨師也」とあり、雨師とは雨を降らせる神のことである。そもそも天と地は全く別々に存在している。雨は天から地へと落ち、両者を物理的に結ぶ。すなわち赤松子は雨乞いによって天と地を結ぶ役割を持つている。しかし赤松子を神であると言い切って良いのだろうか。神は普通天上に存在しているが、赤松子は天と地を行き来してはいるものの地上で生活している。人間が地上に張り付いて存在しているものと定義するならば、地上から離れることが出来る赤松子は人間ではなく超人である。赤松子の人間離れた能力は「服水玉」からもわかる。水玉は水晶のことである。赤松子は薬として水玉を服用していたが、人間が水玉を服用すれば人体に悪影響があるだろうし、好んで服用する者はいないだろう。そのため赤松子は何らかの目的をもって水玉を服用していると考えることが出来る。そして人間であれば火に焼けたら無事ではいけないが、「能入火自焼」のように赤松子は火の中にいても死ぬことはない。仙人が火の中に入って焼け死んだように見せかけて実は天上界へ行く昇仙という術はよく用いられ、赤松子もその術が使えるということだろう。次に登場する甯封子もこの術を使うことが出来る。

また「往往至崑崙山上、常止西王母石室中、隨風雨上下」とあるように、しばしば神々が住むと言われた山である崑崙山の西王母の石室に赴いた。その時はいつも風雨を連れて山を登り降りしたとある。風雨は自然現象である。風雨を連れていくことは、赤松子が風雨を起こしながら山を往復しているということだ。赤松子は火・風・雨のような自然現象を操る能力を持っている。人間の力ではどうすることもできない自然現象を操る赤松子は、限りなく神に近い存在である。

人間は火を手に入れたことによつて食べ物調理することを覚えた。今まで火を通さない食べ物だけを食べてきた人間にとつて火を操ることは革命であった。また雨を降らす雨師の存在も人々に大き

な変化をもたらした。雨が降らなければ植物は生育することが出来ず、飢饉にみまわれ多くの餓死者が出る。そこで雨乞いは古くから行われてきた。雨は人間の生命を繋いでいて、人々は雨を切実に求めてきた。その雨を降らせる人がいたならば、人々から神と崇められても不思議ではないだろう。赤松子が地上で自らの能力を発揮し、人間に教えたことによって人間はより生きやすい世界を創った。そして他の動物と異なった生存の仕方をも身につけたと言ってよいだろう。赤松子は地上の生活をより快適にするため火の扱い方を人間に教え、天候を左右する術を用いて豊かな植物の実りをもたらしたのだ。

・甯封子

甯封子は「黄帝陶正」であつた。陶正は陶器製造のことを掌る長官である。土をこねて器を作るのは人間の文明が発達したことを表している。陶器を作る上で欠かせないのは火であり、火を使いこなせないと器を作ることは難しい。甯封子は火を操り、黄帝のもとで陶器を製造していた。そこへ「有人過之、爲其掌火」とあるように、ある人がやって来て火加減を見る仕事をした。その人は「出五色煙」という術を用いており、人間と言うよりは神に近い。天からやって来た神人が地上に住む甯封子にその術を教え、天と地の橋渡しをしたと言うことが出来るだろう。そもそも人間は火を操ることを知らなかった。火は人間が進化の過程で得たものであり、人間以外で火を自在に操る動物はいない。火の使用は人間と他の動物とを決定的に分けるものであると言えるだろう。仮に石を打ち付けて火を起こすことが他の動物に出来たとしても、その火を絶やさず料理や陶器を作ることに用いるのは人間以外には難しい。人間が火を操ることが出来るようになったのは、神に近い者が人間に教えたからである。つまり甯封子や先程の赤松子などの仙人が、火の使い方を人間に教えたことにより人間は火を操ることが出来るようになったのだ。

また甯封子も赤松子のように「積火自燒」ことが可能であり、「隨煙氣上下」とあるように煙に乗って天と地を行き来したとある。「視其灰燼、猶有其骨」のように骨を残して地上を去り、一見それは死亡したように見える。だが実際は地上を離れ天界へ向かったのである。このような戸解の仕方には様々あり、骨を残して去るもの、履物や衣服を残して去るものなどある。これらのものが残されているということは、死亡したのではなく地上を去り天界で仙人になった証拠である。

甯封子は黄帝のもとで働いていた。地上で陶正という役割を持つて生きていたのだ。そこにやってきた天界の神人との出会いによって甯封子もまた人間離れた能力を身に付けた。しかし甯封子はもとも陶器を作る火を操ることが出来、神人に仙術を教わる以前から神に近い要素を持っていたのではないだろうか。だからこそそれを見抜いた神人は甯封子に仙術を教え、甯封子はその仙術を身につけることが出来たのだ。神人は天界からの使いで、甯封子に火の扱い方を教えるためにやって来たと考えることが出来る。そして甯封子は神人から仙術を教わり、自身も神の使いとなった。つまり火を介して天と繋がったのだ。これは人間が神の指導によって火を自在に操ることが出来るようになったことを象徴している。赤松子は神に選ばれて天からの代理人となったのだ。

・馬師皇

「馬醫」とは馬の医者である。馬師皇は「知馬形生死之診、治之輒愈」とあるように馬の生態や寿命についての知識が豊富で、治療すればすぐに治った。馬の治療において馬師皇よりも右に出る者はいないということだ。そしてそれは天界に住む龍にも知れ渡っていた。馬師皇は馬の医者でありながらも病気の龍を治療してやった。龍は馬と異なった生き物であるが、他の動物と同様に病気になるという点で動物らしい一面がある。しかし他の動物と違うのは自ら治療を求めて医者のもとへ赴くことだろう。普通の動物ならば名医がいると聞いて訪ねてくることはない。その点ではやはり龍は地上に住む他の動物と異なり、天界に住む生き物であることがわかる。

龍は天からの使いであり連絡係である。すなわち龍は天界と地上を結びつける役割を担っている。その龍が馬師皇のもとに向き、自ら進んで「垂耳張口」という行為をすることは馬師皇をとても信

頼している証拠であろう。龍は言葉を離さないが、耳を垂らし、口を開けて馬師皇に病氣を治して欲しいと思っていることがわかる。馬師皇もすぐにそのことを察知し、「鍼其脣下口中、以甘草湯飲之」という治療を施した。外科手術のような大げさなものではないが、口や唇に鍼を打ち、甘草湯という薬を飲ませている。甘草とはマメ科の多年草で、鎮痛や胃痛、解毒などに優れた効果を表し、風邪薬にも用いられる。馬師皇は龍の様子を見ただけで病氣を見極め、適切な処置を施した。すると龍はすぐに完治した。龍が何も言わなくてもどのような治療が必要かを悟った馬師皇は、馬だけでなくどの動物をも治療することが出来ると考えられる。

馬師皇が龍を治してやった後も「後數數有疾龍出其波、告而求治之」とあるように病氣の龍が馬師皇のもとへやって来た。龍の間で馬師皇の評判が広まったのだろう。そして龍は「負皇而去」のように馬師皇を天上界へと連れ去ってしまう。龍を治療できる馬師皇は、天上界で必要な人物であったのだろう。天界にいる龍が病氣になる理由は不明であるが、病氣の龍が度々現われているならば、やはり近くに治療できる者がいた方が便利であろう。それにしても馬師皇は何故龍の病氣を治せるのだろうか。同じ生き物であるとはいえ、馬と龍の生態は異なっている。馬以外の哺乳類、牛や羊などを治療できるならばわかるが、龍は地上の生き物ではないため治療法を学ぶ機会はない。それでも龍を治療できたのは、馬師皇がもともと人間離れた存在であったからではないかと考える。馬師皇は地上ではなく天界で生きるべき人であったからこそ龍が馬師皇を天界へと連れて行ったのだ。馬師皇の地上での役割は、人間と動物との関わり方を教えることであつた。人間は他の動物と共に生きてきた。それは動物を食べるためであつたり、家畜として飼うためであつたり様々である。そのため他の動物とどのように関わり合いながら生きていくかということはとても重要であつた。馬師皇は人間と動物との関係を象徴しているのだ。

・赤將子輿

赤將子輿は「不食五穀、而噉百草花」とあるように普通の人間が食べる物を食べない。それでも生きていくということは赤將子輿が人間離れしている証しだろう。五穀を食べないというのは仙人にはよくあることで、穀物を摂取せず、薬草を服用し仙人になる者も多い。何故赤將子輿は五穀を食べず、花を食べるのか。五穀とは人間の食べ物である。つまり世俗の食べ物である。仙人は天と地の中間に存在している。そのため地上から足が離れていなくてはならない。五穀という人間の食べ物を食べないということは、人間の俗世界から離れていることを意味している。赤將子輿が草の花を食べるのはそれが薬草だからか、それとも赤將子輿が好きな花だからか理由ははっきりしないが、普通の人間は花を食べない。それは花から人間の生命維持に必要な栄養素を摂取することが難しいためである。しかし赤將子輿は花を食べて生きている。赤將子輿の身体が普通の人間とは異なっているからである。もしかしたら健康に良い草の花ばかりを探し食べていたのかもしれないが、そうだとするとその知識の深さは普通の人間とは比べ物にならないと言えるだろう。

また赤將子輿は「至堯帝時爲木工」とあるように木工となつた。木工とは古代の官名であり、車や弓などの木を材料とする工業を掌っていた。そして「時時於市中賣繖」のように狩猟に用いる繖を売っていた。繖は絹のひもであり、鳥を射て捕まえるため矢に結びつける。工業作品も繖も、人間が考えた発明品である。生活をより良くするためには様々な道具が必要である。赤將子輿はそういった道具を人間に教える役割を持っていたと考えられる。狩猟は人間が古代より営んできた。植物を栽培するずっと前から人間は他の動物を狩り、食べてきた。動物が動物を食べるのは食物連鎖において欠かせないことであり、それはこれからも変わることはない。人間はその中でいかに効率良く間違いない動物を捕まえるかに工夫をこらしてきた。失敗すれば人間が怪我をしたり、命を落としたりすることがあるからだ。文明の進歩により、狩猟技術は格段に上昇した。矢の刺さった鳥がひもに絡められて落ちるようにするのも進歩の一つであると言えるだろう。

人間は動物を捕らえ、そして動物を食らうことで生き延びてきた。動物を捕らえることが出来なければ人間が生きていく上で必要なエネルギーを摂取することが出来なくなる。狩猟方法は人間の生死

を左右するのだ。そのため赤将子輿は人間が生きていくために必要な道具を人間に広めるために地上で存在していたのだと考えられる。「能隨風雨上下」は赤松子と同じ能力である。天と地を行き来することによって、天界と地上の橋渡しをしていたのだろう。だからこそ天からの使いである赤将子輿は五穀を食せず様々な草の花の食べていたのだ。

・黄帝

黄帝はその名の通り、天下を治める最高の指導者である。しかも他の帝のように権力で天下を治めていただけでなく、「能効百神、朝而使之」とあるように黄帝は諸々の神に命令を下し、奉仕させて役する力も持っていた。様々な神を使役するのは普通の人間には不可能である。黄帝は並はずれた能力を持っていたということである。それは次に書かれている「弱而能言、聖而預知、知物之紀」の部分からもわかる。幼少の頃からものを言い、未来を予知することが出来、事物の法則を知っていたのであるのだから、黄帝は生まれつき非凡であり、その能力はもはや万能な神に近かった。成るべくして帝になったと言えよう。「自以爲雲師、有龍形」のように黄帝はもはや人間でもなくなった。普段から龍の形をしていたのなら天子として不都合があるだろうから、帝として政務に当たる時は人間の姿で本当は龍の姿であると解釈するのが自然だろう。

また黄帝は「自擇亡日、與群臣辭」とあるように、自ら死亡する日にちを決めた。一見するとそれは自殺のようであるが、黄帝は人間ではないので、地上世界を離れ天界へ行く日を決めたということである。その証拠として黄帝が入っていたはずの棺は「柩空無尸、唯劍寫在焉」であった。これは甯封子でも述べたが、仙人になり天へ昇る仙術である。棺の中に入っていたはずの亡骸が消えたのは黄帝が天界へと去ったからだ。棺が全く空になっていたら、遺体が盗難に遭った、もしくは生き返った可能性もあるが、剣と履物だけ残っているということは、遺体がある場所にあつたまま突然消えてしまったことを印象付けている。もともと神仙要素を持って生まれた黄帝は、役目を終え、自ら天上へと昇って行ったのだ。

帝の仕事は社会に秩序をもたらすことである。天子が存在しなければ社会には身分もルールも無く、争いも多いだろう。人間は一人で生きていくことが出来ない。他者と関わり合い、協力してこそ生きていける。しかし他者と関わりを持つと様々なルールが必要となる。自分の好きなように振舞っているわけにはいかないのだ。人間の進化の過程でリーダーは自然に生まれた。社会で一番小さい単位である家族ですらリーダーが存在する。それよりも大きな単位である地域や国において、リーダーは不可欠である。黄帝の役割は人間に秩序ある社会を教え、天下を治めることであつたと考えられる。黄帝は人間が協力し合い、ルールを守って生きることを読んだ。そして黄帝は役目を終え、天界へと帰って行ったのだ。

・偃佺

偃佺は「槐山采藥父也」とあるように山で薬草を採っていた。何の薬草かは明らかでないが、薬草に詳しく、人の病気を治すことを生業にしていたと考えることが出来る。そんな偃佺だが、姿は普通の人間ではない。「形體生毛、長數寸、兩目更方」とあり人間離れていることがわかる。体毛が数寸生え、両目が四角形の偃佺を人間と呼べるのかは甚だ怪しい。『列仙伝』には他にも毛女という毛の生えた仙人が登場し、桂父という身体の色が変わる者もいる。人間の姿をしている仙人は多いが、そうでない者もいるのだ。毛が生えている者や目の形が普通と異なる者は、一目で人間離れていることがわかり、周囲の人々に丁重に扱われたことだろう。単に異形の姿であれば人々から厄介払いされることもあるかもしれないが、偃佺は薬草を採り、人の役に立っている。まだ医療が発展途中であり、本格的な外科手術も出来ない時代に、薬草を的確に調合し病気を治せる偃佺は神に近い存在であろう。

しかも偃佺は「能飛行、遂走馬」という能力をも持っている。空を飛ぶことは天界と地上を自由に行き来することである。地上から離れることの出来ない人間とは異なっていることがわかる。そして偃佺は走ると馬と同じような速さであつた。馬のように早ければ移動時間が短縮されるため、行動範

囲が広くなる。空を飛ぶことができ、馬のように速く走ればどこでも容易に行くことができる。それは自由ということである。人間が一ヶ所に根付いて生きているのに対し、僊僊は地上から足を離すことすら可能である。人間は地面に張り付いて生きるしかない。そして世間のしがらみから逃れることは出来ない。地上は俗世間である。地面から離れることが出来る僊僊は、社会のルールからも逸脱しているのだ。

「好食松實」のように僊僊は松の実を好んで食べ、「以松子遺堯」や「時人受服者、皆至二三百歳焉」とあるように他の人間にも松の実を勧めた。松の実には松笠の鱗片を剥いて取り出し、加熱して食べる。タンパク質、食物繊維、油脂を豊富に含んでおり、漢方薬として用いる場合もある。効用は肌に潤いを与え、咳を鎮める。現在でも服用されており、非常に健康に良いとされている。僊僊に松の実をもらって服用した者は二三百歳まで生きたとあるので、僊僊は松の実が健康に良いことを知りながら周囲の人々に与えたということだろう。薬草を採り与えることで、人々を健康にし、寿命を延ばしていた僊僊は、人間に医療によって寿命を延ばすことが出来ることを伝えるために存在していたと考えられる。人間は何もしなければいずれ病にかかるか老いて死んでしまう。人の死が運命ならば、医療は運命に逆らうものである。僊僊は地上で薬草を用いることにより、人間が寿命を延ばすことは可能であると教えてくれたのである。

・容成公

容成公は生命誕生の象徴である。「能善補導之事」の補導とは道家の養生法で人間が精気を摂取して体内に蓄えることである。精気は生きていくためのエネルギーである。精気を養えばいつまでも健康で長生きすることが出来る。不老不死を目的に修行する隠者や道士は、精を取り補う房中術を実践した。精気は非常に重要と考えられていたのだ。「守生養氣」とは当たり前のようだが難しい。自ら命を落とすことがなくても、事故に遭ったり、戦争で命を落としたりすることがある。またもともと身体が丈夫でない場合もある。誰もが皆健康に気をつけていれば長生きするというわけではない。だからこそ生命を守るだけでは足らず、積極的に精気を養う必要があるのだろう。精気を養うことによつて身体はより丈夫になり、生命力が強くなる。そして仙人のように何百歳と寿命を延ばすことすら可能になると信じられていたのだろう。別段記述は無いが、養生法に長けていた容成公はさぞかし長生きしたと考えられる。周王に召されたのは、容成公の持つ養生法を他の人間も欲していたという証だろう。

養生法に精通していた容成公だが、老人の姿のまま生きながらえていたわけではない。「髮白更黒、齒落更生」とあるように、若返りながら生きていたのだ。普通ならば一度白くなった髪の毛が再び黒く戻ることはないし、抜け落ちた歯がまた生えてくることもない。髪の毛が白くなり歯が抜けるのは、人体が老化しているからである。それらが再生するのは老化と反しており、もはや人間とは言えない。黒かった髪の毛が白くなる、生えてきた歯が抜け落ちるのは生命のサイクルである。人間はその流れに逆らうことは出来ない。しかし容成公はその不可能を可能にする。髪の毛が白くなり、歯が抜け落ちた先に待っているのは死である。髪の毛が白くなった後に再び黒くなる容成公は生命のサイクルを繰り返しているのだ。そのサイクルが続いている限り容成公は死なないだろう。そしてそれは養生法の実践の効果を他ならない。

人間は思いのまま老いたり若返ったりするのは不可能である。もしも可能であつたら人間は子孫を残す必要がなくなるだろう。容成公は年老いてもまた若返る。その生命の連鎖は生命誕生の象徴である。生命はどんどん繋がっていく。死ぬことのない容成公は確かに人間離れしており、地上で存在していることが不自然であるが、生命の連鎖は人間のみならず動物全てに当てはまる。容成公は人間世界でそのことを自らの身体をもって表現しているのだ。

・方回

今までの仙人が人間離れしており、天界と地上を繋ぐ役目を担っていたのに対し、方回は地上に根

付いて生きている。それは「堯時隱人也」からわかる。隱人とは隱者を指し、隱者は俗人との交際を絶って山奥でひっそりと生活している。人間が一人で生きていくことが出来ない以上、他の人間と協力し、関わり合いながら生きていくしかない。しかし隱者は他の人間との交わりを拒絶し、社会に背を向けた。社会にはルールやしがらみがあり、それらに上手く適応できない人間は生きていくことが難しい。また周囲の人間達を低俗と見なし、自ら俗世間から離れる場合もある。いずれにせよ隱者は社会との関わりを絶った者であると言える。多くの人が社会で決まりを守って生活している時に、その決まりを守れない者は異端であり排除される。大多数からあの人は自分達とは違う者であるとして認識されるようになる。軽蔑されることもあるだろう。しかし方回は違った。「鍊食雲母、亦與民人有病者」とあるように、病人に雲母を薬として与えていたからだ。山中に隠棲していた方回だが、町に下りて積極的に他の人間と関わっていた上に人助けまでしていた。そのことが帝に認められて招聘され、方回は宮廷で働くこととなった。社会に適合できずに山中に逃げ込んだ隱者とは異なっている。

それでは何故方回は隠棲していたのか。それは方回が他の人より優れた能力を持っていたからだと考ええる。普通の人間は雲母を食べることは無い。しかし方回は雲母を練って食べ、しかも雲母を用いて病気を治すことも出来る。普通の人間が不可能なことも方回にとっては可能なのだ。優れた能力は周囲から羨望を受けると同時に嫉妬されることにもなる。それが「爲人所劫、閉之室中、從求道」である。方回は彼の能力に目をつけた者に監禁され、道術を教えろと要求される。自らも方回のようになりたいたいと考えていた人がいたという証である。方回は「回化而得去、更以方回掩封其戸」とあるように、姿を変えて逃げ出し、さらに方回という印を押した泥でその戸口を封印した。そして方回は身を守ることに成功し、方回を閉じ込めた者は道術を得ることが出来なかった。そのエピソードから道術は簡単に教えてもらおうことが出来ないのがわかる。誰でも仙人になれるわけではないのだ。仙人を監禁し、道術を教えてもらおうという他力本願な甘い考えを持つ人間は到底仙人に相応しいとは言えない。方回は道術を見せつけ華麗に脱出することでそれを示している。

・老子

老子は今までの仙人よりもずっと人間らしいと言えよう。それは「老子姓李名耳字伯陽」とあるように姓・名・字を持っている。つまり老子は人間として地上に生まれてきたということだ。『列仙伝』で仙人の一人として扱っている老子は道教の始祖とされ、多くの伝説が残っている。老子は哲学者であり、「爲周柱下史」のように、朝廷で活躍した。柱下の史とは常に宮殿の柱の下にいた侍従の書記官のことである。帝に近い場所で待機しているということから、帝から老子への信頼と期待の大きさがわかる。

老子の信念は「好養精氣、貴接而不施」である。それは精気を養成し、摂取すれども消耗しないということである。前の容成公でも述べたが、精気は生きていくのに必要なエネルギーとなる。仙人は精気を養うことで若返ったり、長生きしたりする。精気を絶えず摂取し続ければ死ぬことも無い。実践している老子もまた仙人である証拠だろう。他の仙人と異なり人間として生まれてきた老子だが、中身は人間離れしていて神に近いと言える。だからこそ「史記云、二百餘年」のように二百歳まで生きたと言われているのだ。

人間が生きていく上で必要なものはたくさんある。火の扱い方、道具、動物との接し方、秩序、医療などを様々な仙人が人間に広めてきた。人間が地上で快適に生きていくために、天界から仙人という神の使いが来て、人間達に様々な知恵や技術を授けて行なった。こうして出来上がった人間世界に、最後の仕上げとして老子は哲学を与える。哲学とは物の考え方である。一国のリーダーである帝に物の分別を教え、国をどのように発展させていくべきか、人間はどのように生きていくべきかを説いた。大自然の中で、裸のまま動物を追いかけて食料を取っていたような原始的生活に比べると、文明が発展し、人々は豊かになった。一人ひとり仕事を持ち、貨幣を用い、身分制度のある社会が出来上がった。そして豊かさと引き換えに、人間とは何か、どのように生きていくのかという問題が生じた。それは人間の生理的欲求が満たされた証拠である。老子はそんな社会を満たすために地上に生まれてき

た。「仲尼至周、見老子、知其聖人、乃師之」のように孔子が老子を師事したというエピソードまで残っているほど、老子が社会に与えた影響は大きかったと言えるだろう。そして老子が哲学を広めたことによって社会は完成したのである。このことから老子は人間に哲学を与えるという役目を持って地上に生まれてきたことがわかる。

・關令尹

赤松子から老子までの九人の仙人は人間世界で何らかの役割を持って存在していた。人間と言うよりも神に近く、天からの使いとして地上で人間達に様々な知識や技術などを教えた。しかし關令尹はそういった役割を持たずに人間世界に存在し、老子との出会いによって仙人になった。もともと仙人だったのではなく、人間から仙人になったのだ。

關令尹はもともと大夫として宮殿で働いていた。「善内學」とは予言の術に精通していたという意味である。關令尹は非常に勉強熱心であり、「常服精華、隱德修行」のように物の精を服用し、人柄を隠して修行につとめた。關令尹は仙人になることを目指していたのである。『列仙伝』には様々な仙人の伝記があるが、仙人になるために薬草を服用し、山奥に籠って修行している者も多く、關令尹もその一人であった。普通の人間でも服薬や修行によって仙人になることができるという認識があったのだろう。そして關令尹には仙人になれる素質があった。だからこそ老子を優れた人物であると見抜くことができたのだ。

「老子西遊、喜先見其氣、知有真人當過、物色而遮之、果得老子」とある。老子が西へ旅をした時、關令尹は老子の気を見て真人が通ることを知り、待ち構えていたところ老子を発見したという意味である。道教では優れた人物の上には、一種の気が立ち込めていると考えられている。その気は普通の人には見えないが、道術を得た人はたとえ遠くからでも感じ取り、それがどんな人物の気なのかわかる。もしも關令尹が凡人であったならば老子の気に気づくことは出来なかっただろうが、關令尹は予言の術に精通し、仙人になるために修行をしていたため気づくことが出来た。關令尹が老子に気づいたのは偶然ではない。会うべくして二人は出会ったのだ。そして老子も「知其奇、爲著書授之」ととなった。人間離れしていて神に近い老子が、關令尹を優れた人物であると認め著書を作って与えた。そして「後與老子俱遊流沙、化胡」とあるように關令尹は老子とともに砂漠を旅し、西域の人となった。つまり自分の住み慣れた土地を離れ、老子とともに旅をして人間から仙人へと変化したのだ。その証拠に「服苴勝實、莫知其所終」とある。關令尹は普通の人間であることを辞めたのだと考えられる。

これまでは仙人が人間の下に来て何らかの役割を果たすという構図であったのだが、關令尹はあくまで優れた人間であった。天からの使いである仙人が地上に何かをもたらすという仙人観から、人間でも修行をすれば仙人になれるという仙人観へ変化したと言えるだろう。『列仙伝』の冒頭の仙人十人は仙人観を知る上で非常に重要な人物なのである。

仙人はかつて僊人と書いた。僊には「うつす」と言う意味がある。つまり天のものを地にうつす人という意味で僊人と呼ばれたのだと考えられる。もともと仙人は天界から地上へやって来て人間に生きる術を教えていた。しかし人間がそれを身につけ、社会が出来上がると今度は優れた人間が神に近づくようになった。天界から使者を送る必要がなくなったのに対し、人間は様々な術を身につけ人間離れしていった。涓子以降のバラエティーに富んだ仙人達はそういった人間離れしていった人間を表しているのだ。

第二章 仙人の特徴

第一章では赤松子から關令尹までの十人の仙人について考察した。第二章では涓子から劉安までの六十三人の仙人について、何故彼らが仙人と呼ばれるのか、普通の人間とどのように異なっているの

かを明らかにするため、飲食・服薬、身体的特徴、生業、特殊能力、消え方の五点に注目し分類を行った。(13ページ表1)

・飲食・服薬

六十三人の仙人は植物から鉱物まで何でも用いるが、種類にばらつきがあり、また服薬していない者もあり、仙人は服薬しているものと一概には言えない。しかしどの仙人も動物性の物を摂取している者はほとんどおらず、多くは植物や鉱物から栄養を摂取していると言えるだろう。植物を調合し服用する発想は現在でも漢方のように残っている。そのことから仙人が単にベジタリアンだっただけではなく、長生の薬という認識を持った上で服用していたと考えられる。それでは何故動物ではなく植物を長生の薬として選んだのだろうか。それは動物よりも植物の方が長寿であることを仙人が知っていたからである。動物は長寿の物もいるが、大体は百年も生きることは無い。それに対して、植物は動物が誕生する遙か昔から繁栄し続けている。仙人は植物を服用することでその長寿の力をあやかりたいと考えたのだろう。鉱物もまた同様である。風化はすれども消えてなくなることはない鉱物から仙人は不老不死を感じたのだろう。

植物では肉桂・松の実・朮、鉱物では石髓・石脂が二〜三名が服用しているが、それ以外は共通して服用しているものはなく、仙人個人の好みで服用していたと考えられる。そして仙薬による効用も明らかではない。

・身体的特徴

仙人といえば不死という特徴が挙げられるが、『列仙伝』に掲載されている仙人達の年齢は七十歳くらいから千歳まで様々である。通常であれば百歳を超える頃には体が衰え、誰が見てもすぐに老人であるとわかるが仙人は違う。二〜三百歳でも二十歳くらいの若者に見える者がいる。白髪が黒くなり、歯が生え変わる者もいれば、何度死んでも生き返る者もいる。仙人にとってたとえ不死であつたとしても、衰えた老人の姿のまま生き永らえるならば魅力はないのだろう。だからこそ若く、活動的だった頃の姿で存在している。また素晴らしい容色の鈎翼夫人や園客がいる一方、耳が七寸あったり、体に毛が生えていたり、黒・白・黄・赤色に変化したりする仙人もいる。これらの仙人は人間と妖怪の中間に存在しているが、周囲の人々は敬って丁重に扱っていた。妖怪のような姿をしていれば周囲の人に嫌悪され、排斥されてもおかしくない。人型をしていないのは、それだけ優れた能力を持っているからだという認識があつたのだろうか。いずれにせよ『列仙伝』の中の仙人は必ずしも人型をしているとは限らない。そして老いて今にも死にそうな者もないことがわかる。

・生業

全ての仙人がどのようにして生計を立てていたかは書いていないので不明だが、明らかになっている者の中では薬を売っていた者と帝に仕えていた者が多いと言える。仙人は自ら仙薬を調合し服用しているため、それを周囲の人々に売っていても不思議なことではない。中にはお金を取らず病氣の人に薬を配る者もいて、周囲の人から敬われていたことは容易に想像できる。仙人もらった薬を服用したことにより自身も仙人になった者もいて、仙人に感謝していた者は多かっただろう。そうして尊敬され、丁重に扱われることで評判は広まり、帝の耳に入った。不老不死に興味を持っている帝は使いをやって仙人を朝廷へと呼んだのだ。そのまま朝廷で帝に仕えることになった者もいる一方で、頑なに帝の要求を拒否し、命を狙われた仙人もいた。しかし大体共通しているのは私利私欲のために生きている者は少ないという点である。扇や彫刻、鶏などを売っている仙人たちは、あくまでもその収入を自身の生活のため、また貧しい者を助けるために使う。莫大な富を築いて豪邸に住んでいる仙人はいない。すなわち、俗人にとっての裕福な暮らしは、仙人にとって何ら魅力はないのである。このことから仙人と普通の人間の価値観には違いがあると言える。

・特殊能力

仙人は様々な能力を持っている。仙人の持つ特殊能力は二種類に分けられる。人間よりもさらに優れている能力と、人間にはできないことができる能力である。前者は上手い酒を作ったり、器用でたちまち器械を作り上げたりするのに対し、後者は石の羊に変身したり冬に桃や李を売ったりする。中でも一番多い能力は予言である。生死存亡や災害を予言する能力は冬に単衣、夏に股引を着る能力よりもずっと周りの人々に与える影響は大きいだろう。仙人だから予言ができるのか、予言ができるから仙人なのかはわからないが、仙人を信じた者は救われ、信じなかった者は予言の通りに災害に合うことから、仙人の予言はよく当たると考えられる。また、天気を操る能力は気候不順の時に重宝されるだろう。だが、仙人の特殊能力が必ずしも人の役に立つとは限らない。深呼吸法や身体練磨の術は仙人自身の体に影響を及ぼすだろうが、周囲の人には全く関わりがない。また陰生のように自分に泥水をかけた人の家屋を倒壊させる仙人もいる。確かに乞食のような仙人に泥水をかけることは褒められる行為ではないが、仙人が自身の特殊能力を用いて仕返しをするのは大人気ないと言えよう。薬を配って人助けをしている仙人もいる一方で、陰生のような周囲の人間に迷惑をかける仙人もいるのだ。

・消え方

仙人は不老不死であるため、死亡を確認されることはない。そのため多くの仙人は最後に行方不明となる。死亡して埋葬されたとしても、棺の中から消えてしまう。『神仙伝』では衣服だけを残して遺体が消え、昇仙する尸解という方法が一般的であるが、『列仙伝』では棺に残していく物は書物であったり履であったり様々である。ただ単に死亡したのならば、仙人ではなく普通の人間である。だからこそ仙人は遺体が消失するのだ。消えることで仙人は死んだのではなく、天に昇って仙界で生活していると主張することができる。

『列仙伝』における仙人全てがどのように消えたのかはわからない。だが、人間と同じように死亡した者はいない。仙人は行方をくらまし最期がわからないからこそ仙人なのである。人間が普通の生活を営んでいたら、ある日突然消えることは無いだろう。住み慣れた土地を離れるとしたら、それには重大な理由があるに違いない。行方をくらますのは仙人と人間の違いであると言えよう。仙人は死なない。死なない以上消えるしかないのだ。一度消えた仙人がまた戻ってくるのは、仙人が死んだのではなく何処かで生きているのを印象づけるためだろう。もしくは自分のことを忘れて欲しくないという思いがあるのだろうか。世間との繋がりを絶つために自ら行方をくらましたはずなのに、本当は心のどこかで人間との接触を求めているのかもしれない。

『列仙伝』の仙人を以上の五つの観点から分析してみたが、仙人は多種多様であり、一概に仙人はこうであると言い切ることは難しい。仙人が六十三人いれば六十三通りの性質がある。だが大雑把に仙人の傾向をまとめると、植物・鉱物を服用し、若く見え、最後は行方不明になると言えよう。仙人は個性豊かであるからこそ魅力があるのかもしれない。

仙人は社会に適合できなかったため、人里離れたところでひっそりと何百年も生き続けているという考え方もあるが、それは本当だろうか。仙人は帝に仕え国を良くするために働いている者もいれば、自分で作った薬を病氣の人に配る者もいる。災害を予言し、村の人々を助けたり、行方をくらました後にまた何十年後に戻ってきたりするのは、仙人が人間との繋がりを欲しているからではないだろうか。そもそも人間と接するのを嫌い、山奥にこもって生き続けているのならば、俗世間の人間から仙人として尊敬されることはない。貧しい人を助けて感謝されることは、仙人自身が望んでいることなのだ。普通の人間なら俗世間から排斥され嫌われていたら、何百年も生き続けたいとは思わない。俗世間にいるのが嫌ならば、昇天し仙界で暮らせば良いだけのことだ。俗世間で何百年も生き続ける仙人は、誰よりも人間世界に未練があり、執着していると思えてならない。

第三章 『列仙伝』『神仙伝』の比較

第一節 比較

『列仙伝』は六十三人、『神仙伝』は九十二人の仙人が収められている。その中で『列仙伝』『神仙伝』の両方に登場するのは老子・彭祖・劉安の三人である。この三人を比べてみると、『神仙伝』では『列仙伝』よりも遥かに多くのエピソードが付け加えられており、仙人の物語性が増していることがわかる。同じ人物でありながら、何故このようなエピソードの付け足しが行われたのか。それは『列仙伝』が書かれた頃よりも『神仙伝』が書かれた頃の方がより小説の文化が発展したということもあるだろう。また、仙人であれば恐らくこのようなエピソードもあつたに違いない、このようなことも出来るに違いないという作者の仙人に対する願望が現れているからだと考えられる。老子・彭祖・劉安の三人を比べると、付け加えられたエピソードの多さに驚くだろう。それではどのようなエピソードが付け加えられたのかを一人ひとり検証する。(16ページ表2)

・老子

『列仙伝』と『神仙伝』で同じ部分は字が伯陽であること、王室文庫の司書であつたこと、孔子が老子を師事したこと、関守の尹喜と出会つたことである。『列仙伝』と『神仙伝』で食い違う部分は、名が耳であること、死後に聃という名を贈られたこと、老子自身が『道德経』上下巻を著述したことである。これらの部分は『神仙伝』では名は重耳であり、老子は生前から聃という名であつたこと、『道德経』は老子が口述した物を尹喜が後で筆記したとなつている。重複のない部分は『列仙伝』では老子が周王朝の政治力が衰えると青牛に牽かせた車に乗つて国を去つたこと、精力の涵養充実に熱心で、摂取はするが消耗しないということを重ねたこと、当時隠君子だと評判であつたことなどがある。『神仙伝』では老子出生時のエピソード、孔子、陽子、尹喜とのやりとりが付け加えられ、老子の人柄がうかがえる。『列仙伝』に比べ、豊富なエピソードが付け加えられたことによって、老子の持つ神秘性、道や政治に対する考え方などがわかる。

また、『列仙伝』では老子の仙術についてほとんど記述は無いが、『神仙伝』では徐甲という下男を骸骨にして、生き返らせる術を披露している。これは『神仙伝』が書かれた頃の老子像が仙術を使う魔法使いのような存在として認識されていたからではないかと思われる。老子は道教の始祖とされ、周囲の人間に与えた影響は非常に大きかつたことがわかる。そのため『神仙伝』では老子が神化され、豊富なエピソードが付け加えられたのだろう。

・彭祖

『列仙伝』と『神仙伝』で共通する部分は、姓が錢、名が鏗であること、殷の大夫であつたこと、肉桂を服用していたこと、導引行気の法に熟達していたことである。食い違つている部分は、顓頊の曾孫であつたこと、殷の末年には八百余歳になつていたこと、靈芝を常食としていたことである。『神仙伝』では、顓頊の玄孫であり、殷代の末にはすでに七百六十七歳になつていて、雲母粉・麋角散などを服用していたとある。

老子の場合、『神仙伝』でエピソードが付け加えられたことにより老子がどのような人柄であつたかがわかるが、彭祖の場合はエピソードよりも彭祖の仙人に対する考え方、具体的な長生の方法について細かく記載されている。彭祖は老子のように仙術を使うことも無く、どこに出歩いているのかわからないような不思議な部分はあるが、至つて普通の人間と同じように生活している。そのことから彭祖が七百歳以上も生きているのは、日々の修行や仙薬を服用しているからだと考えることが出来る。政治には関わらず、名声も気にせず、彭祖は朝廷で活躍した老子とはまるで異なる。静かに隠居生活を送りながら仙人とは何かを語る彭祖は仙人の研究者のようである。

『神仙伝』で彭祖の語る仙人像は、『列仙伝』に挙げられている仙人とは少し異なっている。そのため第三章第二節で詳しく考察する。

・劉安

劉安は『列仙伝』における他の仙人に比べて記述が少ないため、どのような人物なのか推測するのが難しい。その分『神仙伝』では詳しい描写があり、劉安が博学で才能に溢れていたことがわかる。そして八公という仙人の教えによって劉安自身も昇仙したことが明らかとなっている。

『列仙伝』と『神仙伝』ではほとんど異なっている部分がなく、『神仙伝』は『列仙伝』にある記述にエピソードを交えながら詳しく説明している。『鴻宝万畢』を記したという部分では、どのような内容であったか、またどのような経緯であったかが描写され、八人の老翁が王を訪れて『丹経』を授けたこと、劉安が使い残した仙薬の残りを舂めた鶏や犬が昇天したことについては、会話からどのようなやりとりがあったのかを説明している。

『神仙伝』によると、劉安は昇天することを望みながらも追い込まれるまでなかなか実行できない。仙術が使えるようになることで仙人に近づいたが、劉安は満足していない。王として一国を統治し、帝の信頼も厚い劉安だが、人間世界より天界での自由な生活を夢見ていたのだろう。ところが煩雑な人間世界から昇天した劉安であったものの、天界での人間関係に苦勞し、仙人社会で官職に就くことができないことが記されている。はたして劉安の本当の望みが叶えられたのかは不明である。

第二節 彭祖から見る仙人像

彭祖は『神仙伝』において昇天の仕方、仙人の定義、寿命を育てる方法について述べている。『列仙伝』ではそれぞれの仙人の伝記があるだけで、仙人とはどのような存在かを説明したものは少ない。そのため彭祖の考え方を知ること、『神仙伝』では仙人をどのように捉えているのかがわかる。そこで『列仙伝』から時代が経て『神仙伝』が書かれる頃には、仙人という存在がどれほど変化したのかを考察する。

まず彭祖は昇天の仕方について、金丹の服用と、精力を大切に養うこと、薬草を服用することを提示している。しかし金丹は方法が重大であり難しく、薬草を服用しても長生はできるが鬼神を役使したり虚空を飛行したりはできない。『列仙伝』では金丹は全く出てこなかったが、『神仙伝』ではポピュラーなものになっている。何故金丹なのかといえば、鉱物は滅びないという認識と、金という輝きのある物を体に入れることにより体にも良い影響があるはずだという認識があったのではないと思われる。また、精力を養うこと、仙薬を服薬することは『列仙伝』の頃にも実践されているが、その効用は明らかではなかった。『神仙伝』では効用が明らかになり、自分の目的に合わせて服薬するようになった。これは仙人になるための研究が行われているということだろう。

彭祖は仙人の定義について次のように考えている。雲の中に飛び上がり、羽がなくても飛ぶ。竜に乗り、雲に乗って天宮に赴く。鳥獣に化して大空を飛び廻り、河や海に潜り、名山に飛び翔る。天然の氣を食し、靈芝を食する。顔に異様な骨相があらわれ、身体には奇妙な毛が生えたりする。人間界に出入りしても誰にも気づかれず、身を隠して誰にも見られない。大抵は深山僻遠の地に住むことを好み、俗物とは交わらない。すなわち、人間と異なる点は、空を飛ぶこと、仙薬を服用すること、容貌、世間との交わり方である。一人の仙人が全ての能力を持つていたとは限らないので、この条件の一つでも当てはまる者は仙人であると見なすことができる。ところが彭祖はそのような仙人になることを願っていない。彭祖は仙人になるよりも、美味しい物を食べ、軽やかな美服をつけ、陰陽を通じ、官職に就き、筋骨たくましく、顔色に光沢あり、老いて衰えず、延年長寿で、いつまでも世に生き永らえることを望んでいる。このことから彭祖の価値観は俗世間を離れた仙人よりも人間に近いことがわかる。不老不死を望んでいても、仙人のような人間と全く異なる生き物にはなりたくないと思っている者もいるのである。彭祖は不死になると仙人になるのは異なると考えている。

不死になるために、彭祖は次のことを実践するように提示している。冬は温かく夏は涼しくして、四季の調和を誤らず、美女や安逸娯楽について、欲望に惑わされない。また馬車服装などの体裁も足ることを知ってそれ以上を求めず、快い音楽によって耳目を娛ませる。美しい色は人の目を盲にし、音楽は人の耳を聾せしめ、美味は人の口を誤らせるものであり、これが適当という程度に節制ができ、

欲望の開放と抑制を調節できるならば寿命を減らすことなく、益を受けることができる。つまり彭祖は何事も程度を越すとかえって害になるため、程々にすることが必要だと述べている。もしも節制ができなければ、血の巡りを損ね、血氣不足となり、体内の生理も空疎に、脳髓は充実せず、肉体から先に病氣にかかると彭祖は考えている。これらのことから、彭祖は不死になるために仙薬や修行などよりも、自分の体を健康に保つように心掛けるべきだと説いている。

『列仙伝』と『神仙伝』の大きな違いは、仙人のエピソードの量と、体系的な仙人の描写である。『列仙伝』では仙人個々が各々生活をして、特殊な能力を持っていたが、『神仙伝』では仙人がどういうものかという価値観がはっきりしてきており、そのために仙人になるためにどのような修行をしたら良いのかもわかっている。また、『列仙伝』が仙人を記録する役割を持つて書かれたのに対し、『神仙伝』では読み物として楽しめるような工夫がなされていると言える。その理由は中国で小説の文化が発展したのと同時に、『神仙伝』が書かれた頃の仙人に対する興味関心が高かったからだろうと考えられる。

おわりに

今回は『列仙伝』の七十三人の仙人と『神仙伝』の老子・彭祖・劉安について論じた。まず『列仙伝』に登場する冒頭の十人の仙人はそれ以降の六十三人とは違う傾向を持つ。涓子以降に続く仙人が我々の想像しうる仙人の特徴（不老不死、空を飛ぶなど）を持つのに対し、関尹までの十人は天から神の使者という役割を持つて地上に遣つて来て人間に様々なことを教え、そして世の中が出来上がるとまた天へと帰っていく。つまり『列仙伝』冒頭は天地創造の神話的な構造になっている。

涓子以降の仙人達は各々性質が異なり、多種多様である。しかし多くの仙人に当てはまるのは、人間との繋がりに執着していることである。仙人の中には帝に仕え国を良くするために働いている者もいれば、自分で作った薬を病氣の人に配る者もいる。災害を予言して村の人々を助けたり、行方をくらました後にまた何十年後かに戻ってきたりするのは、仙人が人間との繋がりを欲しているからだと考えられる。そのため『列仙伝』の仙人は人間のどこか近くで存在しており、人間と関わり合いながら生活してきた。

『列仙伝』と同じように仙人の伝記を集録する『神仙伝』だが、『列仙伝』の仙人像とは異なる。『神仙伝』は『列仙伝』に比べて仙人個々のエピソードが豊富でより詳しい人柄がわかる。老子・彭祖・劉安は『列仙伝』にも取り上げられているが、その時よりもさらにエピソードが付け足されている。同じ仙人でありながらこのような違いがあるのは、仙人ならばこのようなエピソードもあつたに違いないという筆者の願望が込められているからだと考えられる。そしてその付け加えられたエピソードから『神仙伝』の仙人像が見えてくる。

『神仙伝』の仙人は空を飛び、獣に変化し、人間世界とは距離を置く。万能な仙人になって仙界で永遠に生活するのが理想なのだ。そのために人々は修行し、仙薬を服用した。ところが『列仙伝』の仙人は仙術を使う者もいるが、人々はその能力に憧れたわけではない。『列仙伝』では健康の延長上に不老不死があり、それを体現化したのが仙人だったのである。人々は人助けをして不老不死な仙人のような生き方を目指したのだ。

参考文献一覧

- 『列仙伝・神仙伝』、劉向・葛洪著、沢田瑞穂訳、平凡社、一九九三年。
『山海経・列仙伝』、前野直杉、集英社、一九七五年。

表 1

列仙伝（涓子～劉安）分類

	飲食・服薬	身体的特徴	生業	特殊能力	消え方
涓子	朮			風を喚び起こす	
呂尚	沢芝、地衣、石髓		釣り	生死存亡を予見	二百歳近くになり死を予告して死亡 棺の中には遺骸は無く、『玉鈴』という六篇の書だけあった
嘯父		年をとらない	履物の修理	梁母に火を焚く方を教えた	数十本の炬火を燃やして昇天
師門	桃や李の花びら		竜の飼育係	火を使う術	殺された 風雨が迎え取り、山の樹木が悉く焼け焦げていた
務光	菖蒲や葦の根	耳が七寸			自ら石を負って川に投身 四百余年後再び姿を現す のち尚父山へ出かけた
仇生	松脂	三百余年経っても壮健	木正		
彭祖	肉桂、靈芝	八百余歳		導引行気の法	仙人になって昇天
叩疏	石髓	数百歳	封史	行気鍊形の法	
介子推			扇売り		数十年後行方不明
馬丹			大夫→幕府正		旋風の中に入って飛び去った
平常生		何度死んでも生き返る			衣服と革帯だけが発見された
陸通	櫛の実、蕪菁の種	代々姿を見られている			数百年たって行方不明
葛由		羊に乗る	彫刻売り		山に登った
江妃二女		長江と漢水の神			
范蠡	肉桂	百余歳	大夫→薬売り		代々その姿を見かけた
琴高		二百余歳以上	舎人	涓子や彭祖の術を実践	水中に入って去る
寇先	荔枝の花びらや実	常に頭巾を着用	魚釣り		城門で琴を弾いていたが、数日後見えなくなった
王子喬				笙で鳳凰の鳴き声を吹けた	飛び去った
幼伯子		数十年経っても壮健	食客	冬に単衣、夏に股引を着用	
安期先生		千歳	薬売り		蓬萊山へ去る
桂父	肉桂、葵、亀の脳みそ	黒・白・黄・赤に変化			
瑕丘仲		百余年以上生きる	薬売り→文書		

			送達使		
酒客		百余年以上生きる	酒屋の雇人→次官	美味しい酒を造る 飢饉を予言	辞任して去る
任光		数十歳くらいの顔つき	薬売り	丹砂を煉って丸薬をつくる	行方不明
蕭史				巧に蕭を吹き、孔雀や白鶴を呼ぶ	弄玉という姫と鳳凰について飛び去った
祝鷄翁			鶏・卵を売る	鶏をしつける	呉山に登った
朱仲			真珠売り	大きな真珠を献じる	行方不明
修羊公	黄精			白い石の羊になる	行方不明
稷丘君		白髪が黒くなり、歯が生え変わる	道士	予言	
崔文子		自称三百歳	薬売り	黄老の術に熱心 黄色の散薬や赤い丸薬をつくる	
羨門					
老萊子	漬物、菱の実	七十歳だが幼い言動	自給自足		
赤須子	松の実、天門冬、石脂	歯や髪が生え変わる	漁業の取締官	災害を予言	行方不明
東方朔			手習師匠→侍従→薬売り		
鈎翼夫人	わずかししか取らない	素晴らしい容色	病臥	手に玉製の帯鉤を握る	納棺しても遺体が冷えず一ヶ月間香が漂い、棺内には履のみ
犢子	松の実、茯苓	数百歳だが若く見えたり老いて見えたりした		冬でも桃や李を売る	
騎竜鳴				竜の子を育てる 予言	
主柱				丹砂があることを予言	飛び去った
園客	五色の香草の実	容姿美しい			行方不明
鹿皮公	芝草、神泉の水	鹿の皮の衣類	役人→薬売り	大工仕事が得意	
昌容	木蓐の根	二百歳以上だが二十歳	道人	紫草を見つけることが上手	
谿父	瓜・肉桂・附子・菖菝	百歳以上	平民	飛ぶように駆ける	

山図	地黄・当帰・羌活・独活・ 苦参の粉末				行方不明
谷春			侍従		衣類を残し棺から遺体が消える
陰生			乞食	泥水をかけられても平気 家 屋を倒壊させる	行方不明
毛女	松葉	身体に毛が生えている 飢えも凍えもしない			
子英				魚を捕らえる	
服間		容貌が変化する			
文賣			草履売り		
商丘子胥	朮、菖蒲の根	三百歳以上 老いない			
子主		繊細な声 三百歳以上	甯先生の雇人		
陶安公			鋳物師		赤い竜に跨って東南の方に昇っていった
赤斧	水銀、丹砂、消石	童子のように若返る 赤 い毛髪 掌に紋様	書記官		
呼子先		百余歳	卜師		
負局先生			鏡研ぎ	霊妙な水を出す	蓬萊山に帰る
朱璜	七種類の薬	白髪が黒くなり、鬢の毛は 三尺余			
黄阮丘		毛皮を着用 総髪 耳は 七寸 歯がない 百歳以 上	道士	災害を予言	
女几		見た目は二十歳	酒を売る	味の良い酒をつくる 男女交 接の術	行方不明
陵陽子明	五石脂				
邗子					

木羽					馬車に乗って去る
玄俗	巴豆、雲母	影が無い			
劉安	仙薬				

表2

老子

	『列仙伝』	『神仙伝』
共通する部分	字は伯陽 王室文庫の司書官だった 孔子が老子を師事した 関守の尹喜と出会った	
食い違う部分	名は耳 ⇨ 名は重耳 死後に聃という名を贈られた ⇨ 生前から聃という名であった 老子自身が『道德経』上下巻を著述した ⇨ 老子が口述した物を尹喜が後で筆記した	
重複しない部分	性は李、陳の国の人 殷の世に生まれ、周の書記官 周王朝の政治力が衰えると青牛に牽かせた車に乗って国を去った 精力の涵養充実に熱心で、摂取はするが消耗しないということを重ねた 『史記』には二百余歳とある 当時隠君子だと評判であった	楚の国の苦県曲仁里の人 母が大流星に感じて身ごもった <出生時のエピソード> 老子は天地よりも先に生まれたと言われ、天の精で、神霊の仲間だという 母が懐妊して七十二年後に生まれた 誕生の際母の左脇を割って出て、生まれながら白髪であったから老子と呼ばれた 母には夫が無く、老子とは母方の姓であった 老子の母がたまたま李の木下に行った時に産み落とし、老子は生まれるなり物を言い、李の木を指して「これをばわが姓となすべし」と言った <葛稚川の考え> もし老子が天の精であるとすれば、いかなる世にも出現しないはずはない 尊きを屈して卑きに仕え、逸楽を棄てて労苦を選び、清きに背いて濁れるに入り、天の官位を棄てて人間の官爵を受けることもあるに違いない 道術によって有名となった人は代々あったが、常に一人の老子でなければならぬわけでない 老子は最も優れた得道者だった 老子は恬淡無慾で、もっぱら長生だけを務めとしたので、周にいた期間は長かったにもかかわらず、名声地位に異動が無かったのは、和光同塵で、内に自然を充実させようとしたからであり、道を成就したのちに去った

		<p><『史記』></p> <p>老子の子は宗という名で、魏の国に仕えて將軍となり、功によって段に封ぜられた</p> <p>宗の子が汪、汪の子が言、言の玄孫の瑕が漢に仕え、瑕の子の解が膠西王の傳育官となって齊の国に住した</p> <p>老子はもと人靈だった</p> <p><『西昇』『中胎』『復命苞』『珠韜玉機』『金篇内經』></p> <p>老子は色が黄色で、眉美しく、額は広く、耳は長く、目は大きく、齒並びは疎らに、口は方形、唇は厚い</p> <p>額には十五条の長い線があり、口角月懸の相、鼻は純骨双柱、耳には三漏門、足は二五を踏み、手には十文を握る</p> <p>武王の代には宮廷秘書官となった</p> <p>あまりの長寿ゆえに世の人は老子と称した</p> <p><孔子とのエピソード></p> <p>孔子が老子に礼について質問すべく子貢に様子を見に行かせたところ、老子の弟子になって三年経てば教えてやると言われたため老子と面会した</p> <p>老子は孔子に「孔子の驕慢な自負心と、溢れる野心欲望とは孔子にとって益なきものである」「孔子も道というものさえ修めてゆくならばやがて到達できる。仁義などは必要ない」と言った</p> <p>孔子は後に「老子は雲に乗って大空に遊ぶ竜のようであり、自分は呆然と頭が変になったようだった」と言った</p> <p><陽子とのエピソード></p> <p>陽子が老子に英明な王の政治について問うと、老子は「英明な王の政治は万物に感化しながら人民には君主を頼らせず、徳があってもその名声を称えることもなく、無の世界に遊ぶものではなからうか」と言った</p>
--	--	---

		<p><尹喜とのエピソード></p> <p>老子は尹喜と出会い、尹喜こそ得道すべき運命の者だと知って、関に滞在することにした</p> <p>老子の徐甲という下男が七百二十万文の給金を老子に請求したところ、老子は怒って徐甲を骸骨にしてしまった</p> <p>尹喜は老子が神人ならば生き返らせることができるだろうと考え、徐甲のために叩頭して助命を乞い、老子の変わりに給金を支払いたいと頼んだ</p> <p>老子は徐甲を即座に生き返らせた</p> <p>尹喜は老子の弟子となり、老子は詳しく長生のことを尹喜に伝授した</p> <p>さらに老子は五千言を口述し、尹喜はあとでこれを筆記し『道德経』と名づけた</p> <p>尹喜もその道を実践して仙人になることができた</p> <p><老子の教えによる影響></p> <p>漢の竇太后は老子の教えを信奉したため孝文帝や外戚の竇氏一族もみな『道德経』を読まざるを得ず、読んだものはみな大いに益を得た</p> <p>文帝・景帝の時代は天下平穏で、竇氏も三代続いてその栄寵を保つことができた</p> <p>太子傅育官の疎広父子は深く老子の意を会得し、退官して郷里に帰り、黄金を散じて広く恩恵を施し、その精貴を保った</p> <p>多くの隠士たちも老子の術に従った者は、みな外面の栄華を減らして内なる生命を養ったので、危険の多い時勢にも身を過つことがなかった</p> <p>その源流の広くして遠く、潤すところ、かくも洋々たるは、これぞ天地によって定められた万世の師表ともいうべきではなかろうか</p> <p>莊周などの徒も、老子を元祖として尊ばないものはなかった</p>
--	--	---

彭祖

	『列仙伝』	『神仙伝』
共通する部分	姓は錢、名は鏗 殷の大夫 肉桂を服用 導引行気の法に熟達していた	
食い違う部分	顓頊の曾孫 ⇔ 顓頊の玄孫	

	殷の末年には八百余歳になっていた ⇔ 殷代の末にはすでに七百六十七歳になっていた 靈芝を常食 ⇔ 雲母粉・麋角散などを服用	
重複しない部分	歴陽に彭祖の仙室があつて、雨乞いをすれば効験があり、 つねに二匹の虎が祠の左右に控えていた 祭り終ると地面には虎の足跡がつく のち仙人になって昇天した	若い頃より安静を好み、世事にかまわず、名声を気にせず、外観を飾らず、ひたすら生を養い、身を治めることだけであった 大夫となったがいつも病気を口実にして閑居し、政事にも関与しなかった 生まれつき沈着重厚で、道を会得していることを自分から吹聴したこともなく、また人を惑わすような変化や鬼神怪異のことをするわけでもなく、無為にして奥底知れぬ感じであつた 若い頃から各地を周遊し、時には独りでも出歩くが、誰もその行く先を知らず、ご機嫌伺いに行っても会えなかった 馬車があつても乗用せず、数百日でも数十日でも食料を携えない 家に帰れば衣食は常人と変わりなかった いつも息をつめて腹式呼吸をする 早朝から日中まで正座を続けて、目を拭い、身体を摩り、唇を舐め、深呼吸をすること数十回、それから日常の動作に移る 疲れたり気分が悪くなったりした時には、すぐさま導引閉気の養生法でその患部を治療し、神経が全身にくまなく届き、頭部より諸器官・内臓・手足ないしは毛髪に至るまで、満遍なく行き渡らせ、その気が全身に漲るのを覚えるまでやる その結果、鼻や口を経て十本の指先にまで届き、やがて身体が安楽になる 王がみずから出かけていって質問したが、何も教えてくれないため、いろいろ贈り物をする事前後数万金に達したが、彭祖はそれを悉く受け取って貧しい者に恵んでやり、何一つ遺さなかった <采女とのエピソード> 采女は若くして得道し、性を養う方法を心得ていた 年齢二百七十歳だが、見たところはせいぜい五、六十歳であつた 王は采女を馬車に乗せて彭祖のもとに遣り、道について質問させた

		<p><彭祖の考え> (昇天の仕方)</p> <p>肉身のまま昇天し仙官に補されたいならば金丹を服用しなければならないが、この方法は重大で王にはできない</p> <p>精力を大切に養うこと、薬草を服用することによって長生できるが、鬼神を役使したり、虚空を飛行したりはできない</p> <p>また交接の法を体得しなくては薬を服用しても益はない</p> <p>彭祖は父の死後に生まれ、三歳の時に母を失い、犬戎の乱に遭って百有余年西域を流浪したうえに、若年より精力乏しく、四十九人の妻と五十四人の子とを失った</p> <p>しばしば艱難不幸に遭って健康を害ね、皮膚も光沢を失い、血気も涸れはてたため、仙人にはなれないだろう</p> <p>大宛の山に青精先生がいて、年齢千歳とも伝えられ、顔色は童子のごとく、一日に五百里以上も歩き、一年中食べずにいることもできれば、一日に九回食べることもできる</p> <p>青精先生にこそ真に道を問うべきである</p> <p>しかし青精先生は得道者というだけで仙人ではない</p> <p>(仙人の定義)</p> <p>雲の中に飛び上がり羽が無くても飛び、河や海に潜り、名山に飛び翔る</p> <p>天然の気を食し、靈芝を食し、人間界に出入りしても誰にも気づかれず、身を隠して誰にも見られない</p> <p>顔に異様な骨相があらわれ、身体には奇妙な毛が生えたりする</p> <p>大抵は深山僻遠の地に住むことを好んで俗物とは交わらない</p> <p>これらの仙人は不死の寿命を持ちながら、人情を離れ栄華快樂から遠ざかり、その本然の姿を失うのみか、異形の気を受ける</p> <p>しかし、人たるの道は美味しい物を食べ、軽やかな美服をつけ、陰陽を通じ、官職に就かなくてはならない</p> <p>筋骨たくましく、顔色に光沢あり、老いても衰えず、延年長寿でいつまでも世に生き永らえ、寒暑風雨にも傷われず、鬼神精霊にも犯されず、あまたの凶器悪獣も近寄らず、喜怒の情や毀誉褒貶にも累われないことこそ最も貴ぶべきことである</p> <p>人としての気を受ける限り、たとえ方術は知らずとも、気を養うこと適切ならば、つねに百二十歳には</p>
--	--	--

		<p>なれる</p> <p>多少とも道がわかったならば二百四十歳にはなれるため、それを倍にすれば四百八十歳まで生きられるこの道理を窮め尽くせば不死となるが、仙人にはなれない</p> <p>(寿命を育てる方法)</p> <p>冬は温かく夏は涼しくして、四季の調和を誤らないこと、欲望に惑わされないこと、馬車服装などの体裁も足ることを知りそれ以上を求めないこと、快い音楽によって耳目を娛ませること</p> <p>美しい色は人の目を盲にし、音楽は人の耳を聾せしめ、美味は人の口を誤らせる</p> <p>これが適当という程度に節制ができ、欲望の開放と抑制を調整できるならば寿命を減らすことなく、益を受けることができる。</p> <p>また服気の法が会得できれば邪気も入り込めない</p> <p>そのほかにも吐納導引の術や体内の神々を思念すること、あるいは含影守形のことなど一千七百余箇条がある</p> <p>また四季ごとにその方角に向かって己を責め過ちを謝するとか、早起早寝などの法もある</p> <p>人間は精気を受け肉体を養い、服気煉形の法によって修養すれば体内の万の神々もおのずからその真を守る</p> <p>然らざる場合は、栄養涸れつくして神々も逃げ失せ、いくら思念しても留まってくれなくなる</p> <p>房中において精気を洩らさず、思慮を節し、飲食を適宜にとることによって道は体得できる</p> <p>采女は詳細にそれらの要領を伝授され、それを殷王に教え、王がそれを試みると効果があった</p> <p>王は彭祖の術を継承したが、これを秘密にしたいと考え、国内に布令して、彭祖の道を伝える者があれば殺し、さらには彭祖をも殺して伝承を絶とうとした</p> <p>彭祖はこれを知って国を去ったまま行方知れずになったが、七十余年後に砂漠の西方で見かけた人があったという話も聞かれた</p> <p>王は彭祖の術を始終実行したわけではなかったが、それでも三百歳の寿を得て気力壮健で五十歳くらいにみえた</p> <p>しかし鄭の国から美女を得て淫に耽ったため道を失って王は崩じた</p> <p>のちに黄山君というものがあって、彭祖の術を伝え、数百歳にしてなお若々しかったが、彭祖がいなくなってしまったので、その言をまとめて『彭祖経』とした</p>
--	--	--

劉安

	『列仙伝』	『神仙伝』
共通する部分	『鴻宝万畢』を記した 八人の老翁が王を訪れて『丹経』を授けた 劉安が使い残した仙薬の残りを舐めた鶏や犬が昇天した	
食い違う部分		
重複しない部分		<p>漢の高帝の孫であった</p> <p>文帝は劉安の父・厲王長が罪を得て蜀に移され、道中で死んだことを憐み、その領地を分割して、悉く劉長の子を報じたため、劉安も淮南王に封ぜられる事ができた</p> <p>劉安は遊びばかりに現を抜かず諸王子と異なり、士人に対して腰が低く、儒学を尊重するはもとより、兼ねて占の術にも通じており、天下の秀才ばかり千人を召抱えていた</p> <p>武帝は、劉安が雄弁にして博学、優れた才能あるのを見て、これを叔父として頼みて大いに敬重し、特別の勅令もしくは親書の類は常に司馬相如らとともにその文案を書かせた</p> <p>朝廷の宴会のつど帝に政治の得失を説き、あるいは賦や頌をつくって献じた</p> <p><八公とのエピソード></p> <p>八公という方術の士を招いたとき、王は門衛の役人に質問させた</p> <p>役人は「先生方は年をめしていらっしゃり、老衰を防ぐ術もなく、武勇もなきようにお見受け申す」と言った</p> <p>八公は笑って「われらが老人なるを卑しめらるるとあらばただいま若返ってご覧に入れ申さん」と言い、十四、五歳の童子に変化した</p> <p>それを聞いた王は恭しく招き入れ「冀くは教えを垂れ給え」と頼むと、八人の同時は再び老人に戻り「王は如何なることをお求めか。すべては王のお望みのまま」と言った</p> <p>劉安は朝夕に伺候し、酒肉を勧め、八公が言ったことを試みると千変万化、各種の異術もどれ一つとして効を示さないものはなかった</p> <p><雷被のエピソード></p> <p>劉安の太子・遷は剣法を好み、侍従の雷被を召して試合をしたところ、雷被は誤って遷を打ち込んだため遷は大いに怒った</p>

		<p>雷被は匈奴を撃つことにより罪を償いたいと申し出たが、劉安はこれを許さなかったので心配になり、「匈奴を撃たしめない劉安を誅すべき」と天子に上書した</p> <p>武帝は劉安を重用していたので咎めず、所領の二県を削るに止めた</p> <p>雷被は以前に悪事を働いた伍被と共に誣告して劉安が謀反を企てていると称した</p> <p>八公は「姿を隠し、俗世を去るのがよい」と勧め、劉安は山に登り、大掛りに祭をなし、地中に黄金を埋め白日昇天した</p> <p>後に雷被と伍被の親族全員が誅された</p> <p><『左呉記』></p> <p>劉安は身を隠す際に雷被と伍被を誅したいと考えたが、八公が諫めたため思い止まった</p> <p>劉安はまだ昇天できないでいる</p> <p>劉安は仙人の諸先輩に会っても卑下の礼も行わず、立居振舞も不遜だったため諸仙人の長が「追放されたし」と上奏した</p> <p>八公が代わって陳謝したため赦され、左遷されて厠番を勤めること三年、のちに無位の仙人となったが官職には就けず、ただ不死を得ているに過ぎない</p> <p>武帝は劉安の昇仙の話を聞き、初めて天下に神仙というものが存在することを知って、なんとかして真実の仙人を得たいと念願された</p>
--	--	--